

令和元年6月26日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26253099

研究課題名(和文) 災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデルの構築と活用

研究課題名(英文) Construction and utilization of nursing support model to enhance the family resilience that have been affected by disaster

研究代表者

野嶋 佐由美 (Nojima, Sayumi)

高知県立大学・看護学部・教授

研究者番号：00172792

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 31,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、災害後における「家族レジリエンスを促す看護支援モデル」を構築し、ガイドラインを開発することを目的とした。災害支援活動の経験がある看護職者を対象に面接を行い、質的帰納的に分析を行った。さらにフォーカスグループインタビューを行い、洗練化を図った。

分析の結果、【家族のなかに浸透していく】【苦悩の連鎖を切れるように導く】【崩れた基本的生活を立て直せるように導く】【周囲とつながれるように導く】【止まった時間を再び動かせるように導く】【立ち上がる力を発揮できるように導く】【“家族なりのかたち”を取り戻せるように導く】の7つの看護アプローチが抽出され、それを基盤に看護支援モデルを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

被災家族のレジリエンスを明らかにする研究、被災家族のレジリエンスを促す看護支援に関する研究は、期待されているにも関わらずまだ着手されていない状況にある。研究の成果は、家族レジリエンスを促すための『モデル』と『ガイドライン』を作成することで、災害直後から、家族生活の再構築に向けて家族を支援することが可能になる。さらに、本研究の成果は、災害のみならず、様々な場面で厳しい状況に置かれている家族を理解し、レジリエンスを促す看護の発展に貢献することができる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to construct nursing support model and guidelines to increase the family resilience that have been affected by disaster. Interviews were conducted with nurses with disaster support experience, and results were analyzed using an inductive approach to qualitative data. In addition, focus-group interviews were conducted for refinement purposes.

Results identified seven nursing approaches: “Become a person being the family,” “Provide guidance on breaking the cycle of anguish,” “Provide guidance to re-establish the basic lifestyle, which has been destroyed,” “Provide guidance to establish links with the surrounding community,” “Provide guidance on getting moving again, though it feels like time has stopped,” “Provide guidance on finding the strength to continue,” “Provide guidance on reforming the family unit.” Nursing support model and guidelines to enhance the family resilience including seven nursing approaches was constructed.

研究分野：家族看護学

キーワード：家族レジリエンス 災害 看護支援モデル

1. 研究開始当初の背景

災害は個人、家族、組織、社会、文化に大きな衝撃をもたらすとともに、人々の生活や生き方、価値観の在り方の転換をももたらす。家族は災害によって、生活の基盤としていた暮らしを一瞬にして奪われ、多様な喪失を体験する。それは、家族との突然の死別や行方不明による別離、家屋・財産・職業などの生活基盤の喪失、度重なる転居や離散等、複合的な喪失体験として報告されてきた。さらに、これらの喪失体験は、人々に身体的反応（睡眠障害や食欲不振など）や情緒的反応（悲しみ、怒り、抑うつ、罪悪感など）をもたらす。また、社会からの孤立感や先の見えない不安、家族内での意見の相違など、家族は様々な葛藤を抱える中で、人生設計の変更や修正を求められ、生活の再構築に取り組みなければならない厳しい状況に置かれている。

看護者として、災害が家族の健康や生活に長期にわたって及ぼす影響を理解し、家族と協働して家族生活の再構築を支えることが重要である。家族をシステムとして捉えて、家族を支援する看護はまだ開発されておらず、長期にわたる被災からの影響を考慮すると、災害後の家族生活の再構築を支える看護を開発していくことは看護の喫緊の課題であるといえる。

レジリエンス (Resilience) とは、深刻な危険性にも関わらず適応的な機能を維持しようとする現象、深刻な状況に対する個人の抵抗力 (Rutter, 1985)、重篤なストレス状況下において、一時的には傷つきながらもそこから立ち直っていく過程や結果 (Masten, Best, & Garmezy, 1990) などと定義されている。Walsh は、家族の立場から家族レジリエンス (Family Resilience) について、危機状況を通して家族が家族として集結し回復していく可塑性 (2003)、ストレス・衝撃から回復してくる力 (2006) と論じている。被災によって家族が体験する逆境や逆境に伴う様々なストレスに対して、家族が力を発揮し奮闘して乗り越えていく力、家族のレジリエンスを促す看護介入を行うことは、被災後における家族支援において重要な視点として捉えることができる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、被災家族の家族レジリエンスに注目して、災害後における『家族レジリエンスを促す看護支援モデル』を構築し、モデルに基づいて標準的な「家族レジリエンス促進看護支援ガイドライン」を開発することである。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン：質的研究であり、複数の研究プロジェクトを重ねながら、データ収集・データ分析を行った。

(2) データ収集方法：本モデルは、以下のプロセスを経て作成された。“レジリエンス” “家族レジリエンス” に関する文献検討を行い、家族レジリエンスの定義、構成概念を明確にする、分析の視点となる「家族への看護介入」を既存の文献より抽出する、分析の視点となる「災害に遭った家族への看護介入」を既存の文献より抽出する、岩手や宮城、福島など東日本大震災や広島県の豪雨災害のときに被災家族を支援した経験をもつ看護者(看護師 19 名、保健師 2 名、助産師 2 名、養護教諭 1 名、延べ 26 回)の個別面接によるデータ収集・分析を行う、被災地で活躍する専門性の高い看護職者に対して、被災地の状況とレジリエンスの捉えに関する聞き取り調査を行う、フォーカスグループインタビューのために、シミュレーション事例を作成し、プレテストによる事例の洗練化を行う、被災地支援の経験、あるいは家族支援の卓越した実践力をもつエキスパートの看護者を対象として、シミュレーション事例を用いたフォーカスグループインタビュー方法によるデータ収集・分析を行う (11 回)、個別面接による分析結果とフォーカスグループインタビューによる分析結果(~)を統合する、

統合の結果抽出された 7 つの看護アプローチを個別面接によるデータに戻し、妥当性を確認する、統合の結果抽出された 7 つの看護アプローチと既存の文献を比較検討し、妥当性を確認する、個別面接によるデータが辿ったプロセスを参考に、家族レジリエンスを促す看護支援モデルを作成する。導かれたモデルを基盤とした標準的な「家族レジリエンス促進看護支援ガイドライン」を開発した。さらに領域別(精神・認知症版)のガイドラインを作成した。

(3) データ分析方法：面接内容を逐語録化し、看護支援について意図を含めた形で抽出し、コード化を行った。その後、類似したコードを集めて、カテゴリー化を行った。また、災害時に看護者が被災者への支援を行う際に、家族レジリエンスとして重視している点や家族レジリエンスの捉え方、考え方、家族レジリエンスを高める支援のあり方についての語りがあれば、データとして抽出し、整理した。

(4) 倫理的配慮：研究協力者に対して、研究参加への自由意思の尊重、研究協力およびその撤回の自由、プライバシーの保護、研究によって生じる心身の負担、不利益や危険性に対する配慮、研究により受ける利益や看護上の貢献、データ管理、研究結果の公表の仕方について説明し、同意を得た。本研究は、高知県立大学研究倫理委員会の承認を得てから実施した。

4. 研究成果

(1) データ分析の結果

データ分析の結果、「災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル」は、【家族の

なかに浸透していく】【崩れた基本的生活を立て直せるように導く】【苦悩の連鎖を切れるように導く】【周囲とつながれるように導く】【止まった時間を再び動かせるように導く】【立ち上がる力を発揮できるように導く】【“家族なりのかたち”を取り戻せるように導く】の7つの看護アプローチから構成されることが明らかになった(図1)。

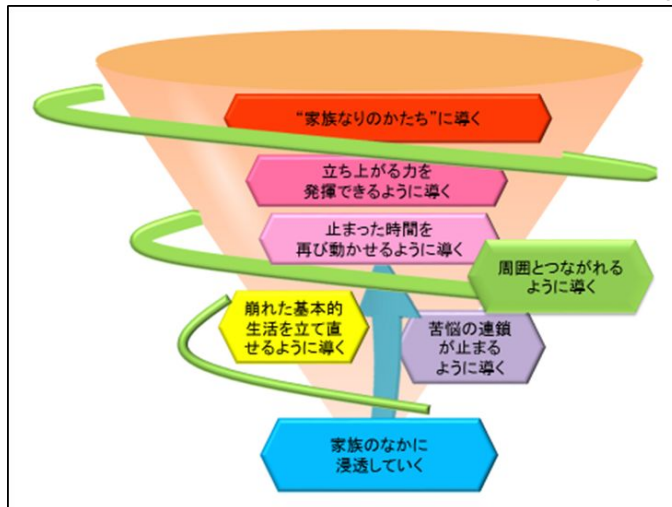


図1. 災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル

・「家族のなかに浸透していく」看護アプローチ

【家族のなかに浸透していく】看護アプローチとは、被災後のストレスフルな状況の中で、家族を脅かさないよう糸口を探りながら、少しずつかかわりを重ねることで家族の中に入っていき、変化の只中にある家族の生活とニーズをつかみ、揺れ動く家族のありのままを受け止め、家族に受け入れられる存在となっていくことである。【家族のなかに浸透していく】看護アプローチとして、〔家族を脅かさないように家族との関係を深めていく〕〔家族の生活を把握しニーズを探る〕〔直面している問題に家族が取り組める時を待つ〕〔家族の揺らぎを認め支持する〕という核となる看護実践が導かれた。

〔家族を脅かさないように家族との関係を深めていく〕には、家族の変化に注目し、家族に脅威を与えない関わりの糸口を探す 家族の気がかりや困りごとに対応し、家族の日常に馴染んでいく、〔家族の生活を把握しニーズを探る〕には、混乱状態の中で、家族の一番の困りごとを見極める、〔直面している問題に家族が取り組める時を待つ〕には、継続的に関わりながら介入のタイミングを待つ、〔家族の揺らぎを認め支持する〕には、家族の表出に対し、肯定的にフィードバックする などの援助行動が含まれていた。

・【崩れた基本的生活を立て直せるように導く】看護アプローチ

【崩れた基本的生活を立て直せるように導く】看護アプローチとは、被災による生活変化の中で揺らぐ家族が、生きるための基盤となる健康と基本的な生活を維持し、崩れた家族の構造や機能を立て直すとともに、物理的・精神的変化により生じた関係性の不調和を調整していくことができるように支援することである。【崩れた基本的生活を立て直せるように導く】看護アプローチとして、〔被災によって揺らいだ家族の基盤となる健康と生活を整えられるよう支援する〕〔家族内に生じた関係性の不調和を調整できるよう支援する〕〔家族の役割やコミュニケーションを整え、家族として機能していけるよう支援する〕という核となる看護実践が導かれた。

〔被災によって揺らいだ家族の基盤となる健康と生活を整えられるよう支援する〕には、家族が自分たちの健康や生活に目を向けられるようにする、家族が自らの限界を認め、困難を抱え込まずに他者に委ねられるようにする、〔家族内に生じた関係性の不調和を調整できるよう支援する〕には 被災体験の温度差によって生じた家族間の不調和を相互理解を促し緩和する、〔家族の役割やコミュニケーションを整え、家族として機能していけるよう支援する〕には 家族の発達課題を踏まえて、家族内の役割を調整し、役割遂行を促す、家族のコミュニケーションの活性化を促す などの援助行動が含まれていた。

・【苦悩の連鎖を切れるように導く】看護アプローチ

【苦悩の連鎖を切れるように導く】看護アプローチとは、被災後の家族がとめどなく押し寄せる悲しみ、恐怖、不安感、喪失感、罪責感などの苦悩の連鎖に飲み込まれてしまわないように、家族の張り詰めた気持ちや苦しみを和らげ、安心できる環境を提供して、家族の処理しきれない様々な感情の表出と整理を助け、溢れ出る苦しみを受けとめる支援である。【苦悩の連鎖を切れるように導く】看護アプローチとして、〔先行きの見えない不安な中で情報や居場所を提供する〕〔張り詰めた緊張や押し寄せる苦悩から解放する〕〔やり場のない気持ちの表出と整理を助ける〕〔災害に伴う周囲との対立や葛藤によるストレスから家族を守る〕という核となる看護実践が導かれた。

〔先行きの見えない不安な中で情報や居場所を提供する〕には、その時点で提供し得る確かな情報を提供して、家族の揺らぎを鎮める、被災体験から距離を置き、安心できる生活の場を提供する、〔張り詰めた緊張や押し寄せる苦悩から解放する〕には、家族が吐露する被災体験に耳を傾け、受け止める、〔やり場のない気持ちの表出と整理を助ける〕には、家族の語りに耳を傾け、気持ちの整理に付き合う、〔災害に伴う周囲との対立や葛藤によるストレスから家族を守る〕には、コミュニティ内や家族内で話せないでいることに耳を傾け、気持ちの負担を軽減する、風評被害については、コミュニティ全体の問題として取り組むなどの援助行動が含まれていた。

・【周囲とつながれるように導く】看護アプローチ

【周囲とつながれるように導く】看護アプローチは、被災により生活場所やコミュニティが変化した中で、家族が信頼できる支援につながり、途切れのない支援をうけることができるように保証するとともに、周囲の人々や地域社会とのつながりが持てるように支援することである。

【周囲とつながれるように導く】看護アプローチとして、〔家族が信頼できる支援につながるよう取り持つ〕〔めまぐるしい変化の中でも被災家族に途切れのない支援を保証する〕〔家族が“そと”とつながるきっかけをつくる〕〔家族が周囲から孤立しないよう調整する〕〔途切れたコミュニティのなかでのつながりをつくりだす〕という核となる看護実践が導かれた。

〔家族が信頼できる支援につながるよう取り持つ〕には、家族が安心して選択できるように、支援を可視化する、〔めまぐるしい変化の中でも被災家族に途切れのない支援を保証する〕には、地域の保健・医療・福祉機関が顔見知りの関係をつくり、持続可能な支援体制を整える、支援者同士の連携を強化し、支援者間のネットワークを構築する、〔家族が“そと”とつながるきっかけをつくる〕には、家族が元々もつ社会とのつながりを再びつなぎ合わせ、強化していく〔家族が周囲から孤立しないよう調整する〕には、地域の家族同士の共感的理解を促す、〔途切れたコミュニティのなかでのつながりをつくりだす〕などの援助行動が含まれていた。

・【止まった時間を再び動かせるように導く】看護アプローチ

【止まった時間を再び動かせるように導く】看護アプローチとは、被災により様々なものを失い、時間が止まったように被災時に気持ちが留まったままになっている家族が、過去を引きずらず辛い体験を自分たちなりに意味づけ、現在そして未来へと、前に向かって歩み出そうという気持ちを持てるように支援することである。【止まった時間を再び動かせるように導く】看護アプローチとして、〔家族が喪失体験を意味づけ前に向かうことを支える〕〔被災という困難さの只中であっても家族の未来があることへの気づきを促す〕という核となる看護実践が含まれていた。

〔家族が喪失体験を意味づけ前に向かうことを支える〕には、現時点で分かっている情報提供を行い、現実を認識できるようにする、家族の持っている力を保証し、前に踏み出すことを後押しする、〔被災という困難さの只中であっても家族の未来があることへの気づきを促す〕には、失ったものだけでなく、残されている精神的な支えや存在などがあることへの気づきを促すなどの援助行動が含まれていた。

・【立ち上がる力を発揮できるように導く】看護アプローチ

【立ち上がる力を発揮できるように導く】看護アプローチは、被災に伴う変化の中でコントロール感や自信を失った家族が、自分たちの力で状況に対応したり、意思決定し取り組んだりすることで、自己信頼を取り戻していけるように、家族が持つ力を見極め、発揮できるように支援することである。【立ち上がる力を発揮できるように導く】看護アプローチとして、〔被災により変化した環境の中で、家族が発揮しうる力を活性化する〕〔被災による家族生活への影響やストレスへの主体的な対処を支える〕〔家族が自らの意思で選択・決定できるように支える〕〔災害によりコントロール感や自信を失った家族が自己信頼を取り戻せるように支える〕という核となる看護実践が導かれた。

〔被災により変化した環境の中で、家族が発揮しうる力を活性化する〕には、家族の回復しようとする気持ちを高める、〔被災による家族生活への影響やストレスへの主体的な対処を支える〕には、家族が主体的に生活するための対処方法を家族と共に考え、提案する、家族が自らの意思で選択・決定できるように支える〕には、家族内で意見を交わし、合意形成に向かうことができるという自信を高める、災害によりコントロール感や自信を失った家族が自己信頼を取り戻せるように支える〕には、家族が「できた」と感じる体験が積み重なるよう、今の取り組みを続けることを勧めるなどの援助行動が含まれていた。

・【“家族なりのかたち”を取り戻せるように導く】看護アプローチ

【“家族なりのかたち”を取り戻せるように導く】看護アプローチは、被災により家族のこれまでのあり方が失われた中で、非日常的な状況においてもこれまで日常的に行っていたことを継続したり、家族としてのつながりを維持・強化したり、家族として大事にしてきたことを守り続けられるように支援していくことである。【“家族なりのかたち”を取り戻せるように導く】看護アプローチとして、〔非日常的状況の中で日常性を取り戻す〕〔家族としてのつながりを維持・強化する〕〔それぞれの“家族らしさ”を保つ〕という核となる看護実践が含まれていた。

〔非日常的状況の中で日常性を取り戻す〕には、被災前の変わらぬ日常を生活に取り入れる、〔家族としてのつながりを維持・強化する〕には、家族のこれまでの姿から家族が力を合わせてここまでやってこられたことを認識できるように家族員1人ひとりに働きかけ、家族みんなと共有する、〔それぞれの“家族らしさ”を保つ〕には、家族が大事にしてきたものを大事にできるように支持するなどの援助行動が含まれていた。

(2). 考察

・家族レジリエンスを促進するための基盤形成を行うコアとなる看護

本研究において抽出された【家族のなかに浸透していく】看護アプローチは、被災によって混乱した、ストレスに満ちた状況の中で、家族を脅かさないように関わりの糸口を探りながら、看護者が徐々に受け入れられる存在となっていく看護アプローチであり、家族レジリエンスを促進するための基盤形成となる看護介入である。また家族とつながる第一歩となる看護介入であり、基盤となる重要な介入である。レジリエンスの一つの構成要素として、揺るぎのない拠り所が挙げられている(中平ら, 2013)が、【家族のなかに浸透していく】看護アプローチは、この揺るぎのない拠り所を共創していく看護介入でもあり、被災家族との援助関係の形成を図る重要な意味をもつ看護介入として捉えることができる。

・苦悩から距離をおき、基本的な生活を整えることができるように支援する看護

Resilience Therapy (2007)においては、基本的な生活の基盤を構築して、対象者の生活ニーズを充足することが重要な要素として位置づけられており、本研究では、家族に対して【崩れた基本的生活を立て直せるように導く】看護アプローチへとつながっている。災害により人々の安全感や安心感が脅かされ、それは人々の存在自体への脅かしとなり(山本, 2006; 小林ら, 2014)、様々な喪失体験や不確かさの中での生活を余儀なくされる。本研究においても、被災した様々な喪失体験や不確かさの中で基本的生活が脅かされている家族に対して、安全で安心できる環境を整えることに看護者は専心していた。家族に対して【苦悩の連鎖を切れるように導く】看護アプローチを行っていくことが、家族が主体的に家族生活の安定を図り、家族レジリエンスを育むうえでも重要である。

看護者は、被災直後から、【崩れた基本的生活を立て直せるように導く】看護アプローチを積極的に用いて家族の基本的生活の維持を図る支援を行っている。このアプローチは被災後の家族生活の安定を図り、家族レジリエンスを促すうえで不可欠な看護実践であると言える。

・家族と地域とのつながりを紡ぐ看護

災害直後から、看護師は家族を支え【周囲とつながれるように導く】看護アプローチを実施していた。レジリエンスについて、富川(2008)は周囲の状況・環境との相互作用を変化させながら、新たな適応に向かう側面に注目している。本研究において、家族が安心して暮らし続けるために【周囲とつながれるように導く】看護アプローチが、家族レジリエンスを発揮する全過程において必要な介入として位置づけられていた。

また、本研究において、家族が新たなコミュニティとつながるように、家族自身が主体的に必要なコミュニティとのつながりを形成し家族レジリエンスを高めていけるようにかかわっていた。個々の家族のこれまでの地域とのつながり、地域との透過性を見極めた上で家族と地域とのつながりを支援していくことは、家族レジリエンスを高め、維持していく上でも不可欠な看護介入であると言える。

・家族の再び歩み始める力を引き出す看護

被災地では、「あの日」から時間が止まったままのように感じている人々がいる一方で、悲しみや失意に何とか対処して、再度、人生を組み立て直している人々も少なくない(高橋ら 2012)。本研究においては、これに見合う家族レジリエンスを促す看護アプローチとして、【止まった時間を再び動かせるように導く】看護アプローチ、【立ち上がる力を発揮できるように導く】看護アプローチが見出された。看護者は、被災によって様々なものを失った家族に対して、家族自身が状況を振り返り、あいまいな喪失に対する理解を深め「希望を見出す」こと、「意味を見つける」ことを支援し、家族が【止まった時間を再び動かせるように導く】看護アプローチを行っていた。レジリエンスの構成要素として、「忍耐強い対処」「自己の能力への信頼」「肯定的な未来志向」などが挙げられており(中平, 2013; 富川, 2008) 家族の再び歩み始める力を引き出す看護においては、家族が備えているこれらの力を引き出し、【立ち上がる力を発揮できるように導く】看護アプローチを行っていた。

・家族らしさを護り、新たに“家族”を取り戻す看護

災害によって地域全体が破滅状態となり、被災者は住処のみならず、生活の基盤を失い、これまでの日常が奪われる。そうした非日常の中で、被災前の変わらぬ日常を生活に取り入れるなど【“家族なりのかたち”を取り戻せるように導く】看護アプローチを行っていた。家族らしい生活を実現させていくための介入であり、家族レジリエンスの一要素である家族の日常の維持(高橋, 2013)につながるものであると言える。

災害復興期における被災者は、地震の後遺症を抱えながらも伝統と文化に裏付けられた誇りと自負が支えとなって生活している(平山, 2014)。本研究において、看護者は、被災によって

変化する非日常の生活の中でも、家族らしい生活が維持できるよう、家族の価値観を見極め尊重しながら被災により打ちのめされた家族の誇りを守る看護実践を行っていた。その人らしさを取り戻し、発展させることは、家族レジリエンスにつながるものであり、看護者は、家族が主体的に家族らしく生きることができるよう家族レジリエンスを強化していたと考える。

5. 主な発表論文等

〔ガイドライン〕(計4件)

- ・「災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル 7つの看護アプローチ Ver,1」
- ・「災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル 7つの看護アプローチ Ver,2」
- ・「災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル 7つの看護アプローチ - 精神版ガイドライン - 」
- ・「災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル 7つの看護アプローチ - 認知症版ガイドライン - 」

〔雑誌論文〕(計1件)

- ・野嶋佐由美, 池添志乃, 井上さや子, 永井真寿美, 瓜生浩子, 坂元綾, 大川貴子, 中平洋子, 畠山卓也, 中村由美, 池内香, 中野綾美, 中山洋子, 田井雅子, 神原咲子, 時長美希, 森下安子, 川上理子, 竹崎久美子, 森下幸子, 山口智治: 災害後における家族レジリエンスを促す7つの看護アプローチ, 高知女子大学看護学会誌, Vol.43 No.2, p24 - 36, 2018

〔学会発表〕(計4件)

・Kaori Makimoto, Hiroko Azechi, Sayumi Nojima, Yumiko Nakamura, Yoko Nakayama, Takako Ookawa, Yoko Nakahira, Ayami Nakano, Shino Ikezoe, Hiroko Uryu, Miki Tokinaga, Yasuko Morishita, Kumiko Takezaki, Masako Tai, Takuya Hatakeyama, Sachiko Morishita, Aya Sakamoto: Challenges faced by Families following a Disaster, 世界災害看護学会第4回大会, 2016.9

・坂元綾, 大川貴子, 池内香, 中野綾美, 池添志乃, 瓜生浩子, 井上さや子, 中村由美子, 中平洋子, 野嶋佐由美: 災害を契機に家族の依存関係を断ち切り家族の立ち上がる力を支える看護援助, 日本家族看護学会第25回学術集会, 2018

・永井真寿美, 池添志乃, 坂元綾, 大川貴子, 田井雅子, 瓜生浩子, 池内香, 井上さや子, 畠山卓也, 中野綾美, 野嶋佐由美: 被災による喪失体験から日常生活が乱れた家族の家族レジリエンスを高める看護援助, 日本家族看護学会第25回学術集会, 2018

・井上さや子, 瓜生浩子, 大川貴子, 池添志乃, 中野綾美, 池内香, 中村貴子, 中平洋子, 野嶋佐由美, 坂元綾: 震災により思い描いていた未来を喪失し混乱している家族の家族レジリエンスを高める看護援助日本家族看護学会第25回学術集会, 2018

・瓜生浩子, 池添志乃, 坂元綾, 井上さや子, 永井真寿美, 中村由美子, 畠山卓也, 森下幸子, 田井雅子, 中野綾美, 野嶋佐由美: 災害後における家族レジリエンスを促す看護支援のあり方 - 家族支援モデルの開発を通して -, 第38回日本看護科学学会学術集会, 2018

6. 研究組織

(1)研究分担者

- ・大川貴子 Ookawa Takako 福島県立医科大学看護学部 准教授 (20254485)
- ・中村由美子 Nakamura Yumiko 文京学院大学保健医療技術学部 教授 (60198249)
- ・中平洋子 Nahira Youko 愛媛県立医療技術大学保健科学部 准教授 (70270056)
- ・畠山卓也 Hatakeyama Takuya 駒沢女子大学看護学部 講師 (00611948)
- ・中野綾美 Nakano Ayami 高知県立大学看護学部 教授 (90172361)
- ・中山洋子 Nakayama Youko 高知県立大学看護学部 教授 (60180444)
- ・時長美希 Tokinaga Miki 高知県立大学看護学部 教授 (163965)
- ・森下安子 Morishita Yasuko 高知県立大学看護学部 教授 (0326449)
- ・山田覚 Yamada Satoru 高知県立大学看護学部 教授 (70322378)
- ・神原咲子 Kanbara Sakiko 高知県立大学看護学部 教授 (90438268)
- ・田井雅子 Tai Masako 高知県立大学看護学部 教授 (0381413)
- ・竹崎久美子 Takezaki Kumiko 高知県立大学看護学部 教授 (0197283)
- ・池添志乃 Ikezoe Shino 高知県立大学看護学部 教授 (0347652)
- ・瓜生浩子 riyu Hiroko 高知県立大学看護学部 教授 (00364133)
- ・森下幸子 Morishita Sachiko 高知県立大学看護学部 特任准教授 (40712279)
- ・川上理子 Kawakami Michiko 高知県立大学看護学部 准教授 (60305810)
- ・坂元綾 Sakamoto Aya 高知県立大学看護学部 助教 (90584342)
- ・榎本香 Makimoto Kaori 高知県立大学看護学部 研究員 (00611972)
- ・井上さや子 Inoue Sayako 高知県立大学看護学部 助教 (30758967)
- ・山口智治 Yamaguchi Tomoharu 高知県立大学看護学部 助教 (80784826)
- ・永井真寿美 Nagai Masumi 高知県立大学看護学部 助教 (50759793)